

平成19年度病害虫発生予報第5号

平成19年7月5日
鳥取県病害虫防除所

予報の概要 [参考]

区 分	農作物名	病害虫名	発生時期	予想発生量	
普通作物	イネ	葉いもち 穂いもち 紋枯病 縞葉枯病 (ヒメトビウンカ) セジロウンカ 斑点米カメムシ類	やや遅い 平年並 平年並 - 早 い 平年並	平年並 平年並 やや少ない 少ない やや少ない やや多い	
果 樹	ナシ	黒斑病 黒星病 輪紋病 クワコナカイガラムシ ハダニ類 シンクイムシ類	- - 平年並 平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並 平年並 平年並 やや多い	
		カキ	炭疽病	平年並	平年並
		リンゴ	ハダニ類	平年並	平年並
		果樹共通	カメムシ類	平年並	平年並
野 菜	ネギ	さび病 黒斑病 白絹病 軟腐病 ネギハモグリバエ ネギアザミウマ	平年並 平年並 平年並 平年並 平年並 やや早い	平年並 平年並 平年並 平年並 平年並 やや多い	
		スイカ	つる枯病、炭疽病 うどんこ病 褐色腐敗病、疫病 アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並 平年並 平年並 平年並	やや多い やや少ない 平年並 平年並 やや多い
	イチゴ		うどんこ病 炭疽病 アブラムシ類 ハダニ類	平年並 平年並 平年並 平年並	平年並 平年並 平年並 やや多い
		ナガイモ	炭疽病	平年並	平年並

気象予報 (抜粋)

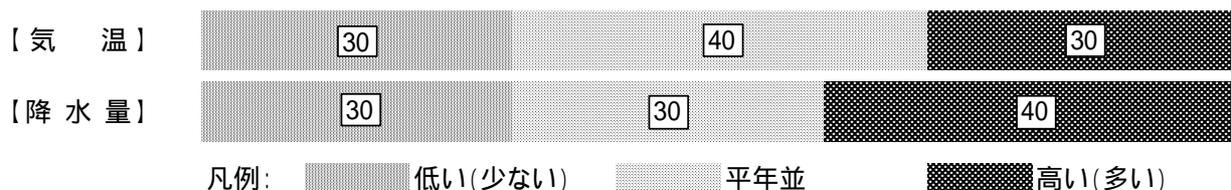
1か月予報(6月30日～7月29日:6月29日、広島地方气象台発表)

< 予想される向こう1か月の天候 >

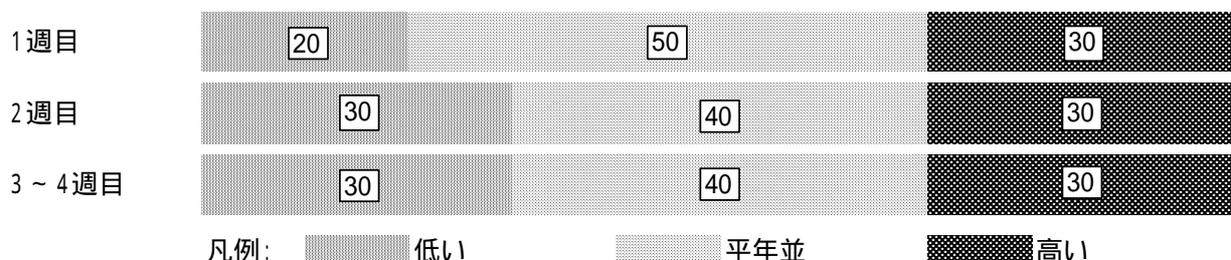
向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量の確率は以下のとおりです。

前半は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。後半は平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

< 向こう1か月の気温、降水量の各階級の確率(%) >



< 気温経過の各階級の確率(%) >



普通作物

【 イ ネ 】

1 葉いもち

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 やや遅い
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬に行った定点調査では、置き苗における発病は認められていない(平年の置き苗発病ほ場率(置き苗発病ほ場数/調査圃場数×100)は4.0%)。
- イ プラストム(いもち病発生予察システム)による感染好適日が6月22日、23日、26日、7月1日及び7月2日に広域的に認められた。
- ウ 県発生予察ほ場(鳥取市)におけるイネのでんぷん蓄積率は平年並である。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、前半の気象は、本病の発生に助長的である。
- オ 本病に弱い「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」の栽培面積が約90%を占めている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 補植用置き苗を放置しているほ場では、置き苗を直ちに処分する。
- イ 長期効果持続型育苗箱施用剤が広域で普及しているが、山間地、常発地などでは十分な効果が得られない場合があるため、ほ場の観察を徹底し、早期発見に努める。
- ウ 上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。
- エ 降雨が続く場合でも雨の止み間に防除を行い、適期を失しないようにする(粉剤散布後3時間程度降雨がなければ防除効果は十分にある)。

2 穂いもち

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域
発生時期 平年並
発生量 平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、イネの生育ステージは平年並、出穂も平年並と予想されている。
- イ 穂いもちの発生は平年並と予想される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、出穂期にあたる後半の気象は、平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 予防防除を基本とし、粉剤又は水和剤を使用する場合は、穂ばらみ期及び穂揃い期に防除を行う。粒剤を使用する場合は、各薬剤の使用基準を確認して湛水散布を行う（湛水散布にあたっては、農薬のラベルに記載されている止水に関する注意事項等を確認するとともに、止水期間を1週間程度とし、また、農薬の流出を防止するために必要な措置を講じるように努める）。
- イ 穂いもちの発生に注意し、ほ場をよく観察して早期発見に努め、上位葉に急性型病斑がみられるようであれば、直ちに粉剤、水和剤などで防除を行う。

3 紋枯病

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 平年並
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア イネの茎数は平年並である。
- イ 昨年の発生量は少なく、越冬菌核量は少ないものと推測される。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、気象は平年並と予想されている。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 幼穂形成期から出穂直前までに1～2回の防除を行う。なお、コシヒカリでは出穂期前15～20日の発病株率が25%、穂ばらみ期の発病株率が18%を防除の目安とする。
- イ 昨年発生の多かったほ場では、特に注意する。

4 縞葉枯病（ヒメトビウンカ）

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生量 少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月第6半月現在、予察灯への総誘殺数はやや少ない。
- イ 昨年の本病の発生は少なかったことから、伝染源は少ないものと見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- 本病の常発地において、育苗箱施用剤を使用していない場合には、防除指針などを参考にして7月上旬までにヒメトビウンカの防除を行う。

5 セジロウンカ

(1) 予報の内容

発生地域 県下全域
発生時期 早い
発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 予察灯における初飛来は5月25日(平年:6月6日)で平年と比較して早い。
- イ 6月第6半旬現在、予察灯への総誘殺数は少ない。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、発生に助長的であると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 今後、梅雨前線の活発化に伴い多飛来も予想されるので、ほ場における生息密度及び病害虫発生予察情報に注意する。
- イ 防除適期は、7月下旬頃になるものと予想される。この時期の要防除水準は、10頭(成幼虫数)/株である。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報の内容

発生地域 早期栽培地域
発生時期 平年並
発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、イネの生育ステージは平年並、出穂も平年並と予想されている。
- イ 県東部の定点雑草地における斑点米カメムシ類の発生は、平年並である。
- ウ 6月第6半旬現在、アカスジカスミカメの予察灯への総誘殺数は平年並である。
- エ 向こう1か月の気象予報によると、発生に助長的であると見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 出穂20日前頃に草刈りを行ない、その後、イネ科雑草が穂をつける前に再度刈り取りを行う。草刈りは地域で一斉に行うと効果が高い。なお、出穂期前後に水田周辺の雑草地、畦畔などの草刈りを行うと、雑草地などで増殖したカメムシ類を水田に追い込む結果となるので避ける。
- イ 水田及び周辺雑草地にカメムシ類の発生が多いほ場では、穂揃い期～乳熟初期に防除指針に従って薬剤防除する。その後も発生が多い場合は、7～10日間隔で追加防除を行う。
- ウ 昨年、斑点米の発生が多かった地域では、斑点米カメムシ類の越冬密度が高い可能性があるので注意する。

果 樹

[ナ シ]

1 黒斑病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月13日に行った定点巡回調査の結果によると、県内の平均発病果率は0.6%(平年:2.5%)であった。また、徒長枝葉の平均発病葉率は1.0%(平年:1.1%)であった。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により徒長枝葉の発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7~10日とし、徒長枝葉の発病の多い園では追加防除を1~2回行う。

イ 防除薬剤は、アントラコール顆粒水和剤500倍液、アリエッティC水和剤800倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

ウ 園内の風通しをよくするため、下草の管理を徹底する。

2 黒星病

(1) 予報の内容

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)における本病の発生量は平年に比べてやや少ないが、一部のナシ園では平年並の発生量となっている。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期間中の降雨により発病が増加するので、梅雨明けまでは防除間隔を7~10日とし、発病の多い園では追加防除を1~2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、キャプレート水和剤600倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

3 輪紋病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 伝染源となるいぼ病斑の発生の多い園が一部で認められる。

イ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 果実の発病は有袋栽培でほぼ防げるが、袋掛けが遅くなると発病が多くなるので早めに袋掛けを行う。また、無袋栽培では梅雨明けまでの薬剤防除を徹底し、追加防除を1~2回行う。

イ 防除薬剤は、ベルコートフロアブル1,500倍液、キャプレート水和剤600倍液、アリエッティC水和剤800倍液、オキシラン水和剤600倍液、アミスター10フロアブル1,000倍液などを使用する。

4 クワコナカイガラムシ

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 第1世代幼虫のふ化初日は、平年並の7月2日(平年:7月3日)に認められた。

イ 前年度は、本害虫による果実被害は平年並であった。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、越冬世代幼虫のふ化最盛日は、平年並の7月6日前後（平年：7月7日）と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 多発園では次の時期を目安に2回の防除を行う。

幼虫ふ化最盛期 7月 6～11日

幼虫ふ化終期 7月12～17日

少発園では7月12日前後に1回防除を行う。

イ 薬剤はスミチオン乳剤1,500倍液、モスピラン水溶剤4,000倍液、ダースバン水和剤25の1,500倍液などを使用し、連用を避けて輪番散布する。

ウ 薬剤の散布に当たっては、カイガラムシが集合する枝葉のほか、枝の切り口、粗皮などにも十分にかかるようにする。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）におけるカンザワハダニの1葉当たりの寄生虫数は、0頭（平年：0.01頭）と平年並～やや低い発生密度となっている。

イ 網掛け栽培などを中心に、ハダニ類の密度が増加しているほ場が一部で認められる。

ウ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。

イ ハダニ類は、種類によって薬剤効果が異なるので、種類を十分に見極める。また、薬剤の散布に当たっては、連用を避けて、輪番散布する。

ウ カンザワハダニ、ナミハダニにはコロマイト乳剤1,500倍液、カネマイトフロアブル1,500倍液などを、クワオオハダニには前述の剤に加えて、ダニトロンフロアブル1,500倍液、バロックフロアブル2,500倍液などを使用する。

エ ナシ園の下草は、ハダニ類の発生源となるので除草を励行する。

6 シンクイムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、フェロモントラップにおけるシンクイムシ類の誘殺数は平年並～やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報から、ナシヒメシンクイの第3回成虫の発生最盛期は平年並の7月下旬頃、モモシンクイが第1回成虫の発生最盛期は平年並の7月上旬～中旬頃と見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発生盛期となる7月以降、シンクイムシ類は連続的に発生するため、定期的な薬剤散布により発生密度を低下させる。
- イ 薬剤はモスピラン水溶剤4,000倍液、ダズバン水和剤25の1,500倍液、スミチオン乳剤1,500倍液、DDVP乳剤1,000倍液などを使用する。
- ウ 授粉樹に残っている果実など(裸果)はシンクイムシ類の発生源となるので、早急に除去する。

[カ キ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 現地における本病の初発生時期は、平年並であった。
- イ 本病は枝幹部に形成された病斑で越冬し、発病樹では常発的に発生が認められる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、本病の発生は平年並と予想される。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 防除薬剤は、7月上～中旬にマンゼブ水和剤(ジマンダイセン又はペンコゼブ)600倍液などを使用する。
- イ 新梢や幼果の発病は降水量と関係が深く、10日間の雨量が100ミリ以上に達すると発病が増加する。
- ウ 発病が認められた新梢や幼果は除去して、園外に持ち出す。

[リンゴ]

1 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)では平年並～やや少ない発生量となっている。
- イ 向こう1か月の気象予報は、ハダニ類の発生にやや好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 例年、ハダニ類の密度は、梅雨明け以後の高温乾燥条件下で急激に高まるので、1葉当たりの成虫数1頭を目安に防除を行う。
- イ 薬剤は、オサダンフロアブル2,000倍液、ダニトロンフロアブル1,500倍液、コロマイト乳剤1,500倍液などを散布し、連用を避けて輪番散布する。
- ウ リンゴ園の下草は、ハダニ類の発生源となるので除草を励行する。

[果樹共通]

1 カメムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、チャバネアオカメムシ、クサギカメムシの予察灯における誘殺数は平年並～やや少ない。また、集合フェロモントラップにおけるチャバネアオカメムシの誘殺数は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、果樹園への飛来時期は平年並の7月下旬頃が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 例年、第1世代成虫が発生する7月下旬頃が果樹園への飛来量が増加する時期なので、定期的にはほ場を見回り、カメムシ類の飛来に注意する。ただし、多発生年の場合、7月上旬頃から果樹園への飛来量が増加した事例があるので注意する。

イ カメムシ類の飛来が認められた場合は、ナシ、カキ、リンゴ、モモを対象としてジノテフラン水溶剤(アルバリン又はスタークル顆粒水溶剤)2,000倍液、ナシ、カキ、モモを対象としてアグロスリン水和剤2,000倍液、ナシ、リンゴを対象としてMR.ジョーカー水和剤2,000倍液などを散布する。

ウ 8月中旬頃から発生する第2世代成虫の発生状況は、今後発表される情報を参考とする。

野 菜

[ネギ]

1 さび病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は気温が24℃以上では発生が少なくなる。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤は、オンリーワンフロアブル1,000倍液などを散布する。すでに多発している場合には、上記の薬剤にカリグリーン800倍液を混用して散布するか、アミスター20フロアブル2,000倍液を散布する。

2 黒斑病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量は平年並である。

- イ 本病は気温が25 前後で、降雨が多い場合に多発する。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 根傷み、肥料不足となると発病しやすいので、ほ場の排水を回り、肥培管理に注意する。
- イ 薬剤は、ダコニール1000の1,000倍液、ポリベリン水和剤1,500倍液などを予防散布する。発病後は、ロブラール水和剤1,000~1,500倍液などを散布する。

3 白絹病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。
- イ 本病は高温多湿で発病しやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 7月上旬の土寄せ前にモンカット粒剤の10a当たり4kgを株上から株元に散布する。または、モンカットファイン粉剤20DLの10a当たり10~15kg、フロンサイド粉剤10a当たり15kgなどを株元散布する。なお、粉剤は畝の両側から株元に散布を行う。
- イ 7月中旬以降に発病がみられる場合は、モンカットフロアブル40の2,000倍液を株元に散布する。その後の発病には、土寄せ前にリゾレックス粉剤10a当たり20~30kgなどを株元散布する。

4 軟腐病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において本病の発生は認められていない。
- イ 本病は高温多湿で発病しやすい。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ネギに傷が付くような無理な土寄せ及び追肥を行うと、発病が助長されるので避ける。
- イ 植付後2か月以上経過し、収穫まで1か月以上を要するものには、7月上旬の土寄せ直前に、オリゼメート粒剤10a当たり6kgを株元に散布する。
- ウ 最終土寄せ前後にナレート水和剤1,000倍液、Zボルドー又はヨネポン水和剤500倍液を7~10日間隔で2~3回散布する。

5 ネギハモグリバエ

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並である。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

防除薬剤は、アグロスリン乳剤2,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液などを散布する。

6 ネギアザミウマ

(1) 予報の内容

発生時期 やや早い

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は、境港地区を中心にやや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後も引き続きやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除薬剤は、ランネート45DF1,000~2,000倍液、モスピラン水溶剤2,000倍液、アドマイヤーフロアブル2,000~4,000倍液、アクタラ顆粒水溶剤1,000~2,000倍液、アグロスリン乳剤2,000倍液、オンコルマイクロカプセル1,000~2,000倍液などを7~10日間隔で散布する。

イ 同一、同系統の薬剤を連用すると効果が低下する恐れがあるので、上記薬剤をローテーション使用する。

[スイカ]

1 つる枯病、炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場におけるつる枯病の発生量は平年に比べてやや多く、炭疽病の発生量はほぼ平年並である。

イ つる枯病及び炭疽病は、降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 雨滴のあたる箇所又は株元から発病するので、薬剤散布は株元及びつる先にも薬液がよくかかるように丁寧に行う。

イ 雨の日が続くと発病が増加するので、散布間隔を5~7日程度とし、雨のやみ間に防除する。

ウ 薬剤は、アントラコール顆粒水和剤400~600倍液、ダコニ-ル1000の700倍液などを予防散布する。発病後は、ポリベリン水和剤1,000倍液などを散布する。

2 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや少ない

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における本病の発生量はやや少ない。
- イ 本病は、25 前後の気温と乾燥条件で発病が増加する。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや少ない発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期からトリフミン水和剤3,000~5,000倍液、ポリベリン水和剤1,000~2,000倍液などを散布する。

3 褐色腐敗病、疫病

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場において褐色腐敗病及び疫病の発生は認められていない。
- イ 褐色腐敗病及び疫病は多雨によって発生が増加し、一度発生すると、急速に広がる。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア ほ場の排水を良好にする。特に豪雨時には滞水のないように配慮する。
- イ 毎年、疫病の発生するほ場では、ジマンダイセン水和剤400~600倍液などを予防散布する。
- ウ 多雨が続くとき、または集中豪雨の後にはリドミルMZ水和剤1,000倍液などを散布する。

4 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	平年並

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、県予察ほ場(北栄町)に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。
- イ 現地調査ほ場における発生量は平年並である。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はアドマイヤー水和剤2,000倍液、マラバッサ乳剤1,500~2,000倍液などを散布する。

5 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期	平年並
発生量	やや多い

(2) 予報の根拠

- ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における発生量は平年並~やや多く、一部のほ場で葉の黄変がみられる。
- イ 県予察ほ場(北栄町)での発生量はやや多い。
- ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

発生初期にはニッソランV乳剤の1,000~1,500倍液、マイトコーネフロアブル1,000倍液、オサダンフロアブル2,000倍液などを散布する。新たに発生が増加する場合や発生がやや多い場合は、コロマイト乳剤1,000倍液を散布する。

[イチゴ]

1 うどんこ病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における育苗床での本病の発生量は平年に比べてやや多い。

イ 発病適温は20前後である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本ほ場に病原菌を持ち込まないために、育苗期間中の防除を徹底する。

イ 防除にあたっては葉裏へも薬剤が付着するように丁寧に散布を行う。発病初期までの薬剤は、ベルコート水和剤1,000倍液、サンヨールの500~1,000倍液などを散布する。

ウ 発病が多い場合には、トリフミン水和剤3,000~5,000倍液、モレスタン水和剤3,000~4,000倍液、サンヨールの500~1,000倍液などを交互に散布する。

2 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地調査ほ場における育苗床での発病はほとんど認められていない。

イ 本病は高温多雨で発病しやすい。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後、平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 育苗期間中、罹病性品種については、下記の薬剤を定期的に散布する。なお、薬剤散布にあたってはクラウン部分、葉柄、托葉、ランナーにも薬液が付着するように丁寧に散布する。下葉かきによる傷口、ランナーの切り口などからも感染するので、下葉かきの直後にも薬剤散布を行う。育苗初期の防除を徹底し、発病株は除去する。

イ 育苗初期は、菌が残っている可能性もあるため、アミスター20フロアブル2,000倍液、ゲッター水和剤1,000倍液及びバイコラル水和剤2,500倍液などを散布する。なお、アミスター20フロアブルは薬害が出やすいため、展着剤を加用しない。

ウ その後の散布薬剤は、ベルコート水和剤 1,000 倍液、デランフロアブル 1,000 倍液、アントラコール顆粒水和剤 500 倍液、ジマンダイセン水和剤 600 倍液などを用いて、7～10 日間隔で予防散布する。

3 アブラムシ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、県予察ほ場（北栄町）に設置した黄色水盤における有翅アブラムシ類の飛来量は平年並である。

イ 現地のイチゴ育苗床における発生量は平年並である。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

薬剤はチェス水和剤 3,000 倍液、ベストガード水溶剤 2,000 倍液などを散布する。

4 ハダニ類

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 やや多い

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、イチゴ育苗床における発生量は、やや多い。

イ 向こう1か月の気象予報によると、今後もやや多い発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 畦畔雑草に対し、ハービー液剤 200 倍液を散布し、除草に努める。

イ 発生初期からニッソラン水和剤 2,000～3,000 倍液、オサダンフロアブル 2,000 倍液などを散布する。発生が多い場合はコロマイト水和剤 2,000 倍液などを散布する。

[ナガイモ]

1 炭疽病

(1) 予報の内容

発生時期 平年並

発生量 平年並

(2) 予報の根拠

ア 6月下旬現在、現地ほ場における本病の発生量は平年並である。

イ 本病は降雨によって発病が増加する。

ウ 向こう1か月の気象予報によると、今後も平年並の発生量が見込まれる。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 肥料切れしないように適度な追肥を行う。

イ 薬剤は、ベルコートフロアブル又はダコニ-ル 1000 の 1,000 倍液、ジマンダイセン水和剤 400～600 倍液などを予防散布する。

[おしらせ]

農薬は、農林水産省の登録番号のあるものを、ラベルをよく読んで使いましょう。
詳しい内容は、独立行政法人 農林水産消費安全技術センターの「農薬登録情報検索システム」から検索できます。(<http://www.famic.go.jp/>)

**農薬の使用に当たっては、農薬使用基準を遵守するとともに、
周辺への飛散には十分注意しましょう。**

< 鳥取県病害虫防除所ホームページ >

アドレス <http://www.jppn.ne.jp/tottori/>

病害虫の発生予察情報やフェロモントラップ調査結果（野菜の各種害虫、果樹のシンクイムシ類）、病害虫の診断方法などの情報をお知らせしていますので、ご利用下さい。

鳥取県病害虫防除所

〒680-1142 鳥取市橋本 260

TEL : 0857-53-1345、FAX : 0857-53-5647

E-mail : boujyot@titan.ocn.ne.jp

次回の予報発表は、8月2日（木）の予定です。